

赤尾勝己編著『学習社会学の構想』晃洋書房、2017年

山 本 冬 彦

本学会の母体である教育文化専修の先生方、及び本学大学院文学研究科教育学専修出身者の手になる研究成果である。「学習社会学」とは、本書から筆者（山本）が受け取ることができる限りの言葉でいうなら、教育から相対的に自立した方向へと「学習が離陸しようとしている」ならば、それを政治的、経済的、社会的な文脈のなかで、とりわけ社会的にとらえ直そうという試みであると受け止めることができる。というよりも、いままで学習が理論的にも実践的にも、多くの場合、ともすればニュートラルなものとして、あるいは「価値的な」ものとしてのみとらえられ過ぎていたのではないか、そこにどのような分析の視野を確保していったらいいのかという問題意識の射程のなかで、本書が組み立てられているといえる。

本書は編者である赤尾の論考が一つのまとまりになって、第Ⅰ部「学習社会学理論のフロンティア」が組み立てられ、第Ⅱ部「学習社会学のケーススタディ」として、他の執筆者による個別具体的な課題に即した展開が行われている。第Ⅰ部では、第1章、「生涯発達」の社会学、第2章、「学習の可視化」の社会学、第3章、「学習組織」の社会学、第4章、「学習都市」の社会学、第5章、「学力・能力のグローバル化」をめぐる社会学の順に論述が展開されている。

紙数が大変限られているので、各章の詳しい紹介は割愛するが、この第Ⅰ部で筆者が重要だと考えるのは、第1章でのブルデューについての言及がなされている部分である。赤尾は、生涯学習社会における人間の学習と時間との関係

について、「社会的時間」と「社会的空間」という新しい概念を提起して、それらが「社会に生きる人間と学びの関係をよりの確に表すことができるのではないだろうか」とした後で、ブルデューは「縦軸を資本総量、横軸を経済資本の±、文化資本±の組み合わせ…からなる『社会的位置関係』の図を描いている（が）…人間の生涯にわたる学習とは、その人間が属している社会の階級、性、人種・民族といった属性（偶有的属性といってもいいだろう——山本）の中で、どのような社会的位置関係にあるのかによって、そのあり方——すなわち学びの内容と方法——が違って来る。したがって学習者は客観的・抽象的な存在ではなく、『社会的行為者としての学習者』（learner as social actor）ということになる」と鋭く指摘している。（本書17頁）

赤尾のこのブルデューを援用した部分をここでさらに詳しく紹介することはできないが、学習が社会的行為として遂行される際に、その時間の使われ方はその人間の社会的位置や立場によって異なり、そこにさまざまな格差や不平等、差別などを再生産するようなかたちで行われるという現実から、私たちは目をそらすわけにはいかない。そして、その次に私たちが検討しなければならないことは、このような社会的な格差や不平等などの現実を、問題解決的な、プラグマティズム的な視点だけで克服できるのかという点である。非常に端的に述べれば、本書の問題の射程はこの点につきるのではないかと筆者は考えている。

「学習」といういわば人間を文字通り特徴づ

けるような営みが、社会全体を覆い、それも従来からのインフォーマルな学習がフォーマルな学習に取って代われ、「可視化」という名の下で評価が行われ、その限りで社会的な文脈や意味を与えられて、「普遍化」されていくという現在のあり方に対して、一定の警鐘と対峙が必要であり、それが具体的には、まさに個々人の「生きられた学習」の中で展開されるのではないか。そのことを個々の課題に即して叙述されているのが、本書、第Ⅱ部の各論であるといえるだろう。

第Ⅱ部では、第6章、「ライフコースにおけるジェンダー意識の変容」、第7章、「移動する子どもたちの文化とアイデンティティ」、第8章、「生涯学習政策・行動の動向と課題」、第9章、「シティズンシップの教育からシティズンシップの学習へ」、第10章、「移民・移住者のシティズンシップの獲得をめぐる」という構成をとり、文字通り「学習社会学のケーススタディ」が行われている。第6章では、現在の日本社会を「多元的変動社会」ととらえ、そこで生きる個人が「生涯にわたって『女』と『男』として社会的に期待される役割やふるまひの変化に対応したり、異なる期待の間での葛藤に対処したりすることを求められている。」とした上で、その中では、「単なる受動的な学習過程ではなく、選択や抵抗を含む反省や再帰的(reflexive)で主体的な自己形成の過程である」(本書117-118頁)という観点から複数の個人の形成過程の分析が行われている。第7章では、「複数文化の期待に抵抗する子どもたち」の姿が描かれていて、従来の「固定したアイデンティティ」像から、人間関係のなかで構築される「過程としてのアイデンティティ」像が模索されている。第8章では、「学習都市」「学習地域」政策の進行のなかで、「労働環境の劣化を放置

したままでは、地域での育児支援や学習支援、青少年育成支援の推進を謳ってみても、基本的な生活保障の実現は困難である」(本書116頁)という正当な指摘が行われ、「合理化」のはざまのなかで、「個人の利害に還元されない定常型社会の構築に寄与する『公共性』が重視される」(本書164頁)ことへの展望が語られている。第9章では「学校教育を問い直すシティズンシップ教育」、「人権教育を通じたシティズンシップ教育」が提唱され、「さまざまな価値が共存する現代社会では、人権は私たち一人ひとりの多様な生き方を守るものである」(本書185頁)という観点が改めて確認され、提起されている。第10章では、「ソイサル (Soysal) が示した『個』に基づいたシティズンシップモデルに注目しながら、「下からの」「トランスナショナルなシティズンシップ」が構想されている。(本書197-198頁)

駆け足で本書の概略を筆者の視点で辿って見たが、最後に、触れなければならないことは、筆者が先に述べた「本書の射程」が、本書のなかでどの程度論じ尽くされているのかということである。これは、もしかしたら評者である筆者の自問自答の域を出ないのかもしれないが、「生きられた自分」をどのように取り戻すのか、という文脈で本書を読み返す時、本書の意味が一番際立つのではないかという印象を持つ。新しい時代を切り開くのは、言語化された政策や規範でなく、その社会のなかで新たに生きる個々人であり、そのなかには、インフォーマルな学びの原点があるのではないか。

最後は、はなはだ抽象的な物言いになってしまったが、書評を締めくくるに当たって、本書が教育学科50周年という節目の年に刊行されたことに同学科の卒業生として敬意を表したい。